

中村光夫全集

第五卷

中村光夫全集

第五卷

筑摩書房

中村光夫全集 第五卷

昭和四十七年四月二十日発行

著者 中村光夫

発行者 井上達三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一―九一
電話 東京 七六五―(代表)
振替 東京 四一―二三
印刷 株式会社 精興社
製本 製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72505 (出版社) 4604

第五卷目次

柳田国男

「新国学談」……………4
歌はぬ詩人……………8

芥川龍之介

芥川龍之介の晩年……………12
「河童」……………14
「藪の中」から……………22
再び「藪の中」をめぐる……………33

菊池寛

新現実主義——主として芥川・菊池について……………52
菊池寛の短篇小説……………61

| | |
|-----------|-----|
| 菊池寛の残した問題 | 73 |
| 里見淳 | |
| 里見淳論 | 78 |
| 里見淳小伝 | 97 |
| 「父親」 | 101 |
| 広津和郎 | |
| 広津和郎 | 106 |
| 宇野浩二 | |
| 宇野浩二小論 | 112 |
| 宇野浩二 | 116 |
| 室生犀星 | |
| 室生犀星論 | 122 |

| | |
|----------|-----|
| 初期の作品 | 141 |
| 瀧井孝作 | |
| 「無限抱擁」 | 148 |
| 青野季吉 | |
| 青野季吉小論 | 154 |
| 「経堂襟記」 | 158 |
| 横光利一 | |
| 横光利一論 | 164 |
| 横光氏の意味 | 177 |
| 横光利一氏を思ふ | 183 |
| 井伏鱒二 | |
| 井伏鱒二論 | 190 |

| | | |
|--------|-------------|-----|
| | 井伏鱒二の作品 | 219 |
| | 「黒い壺」 | 228 |
| 伊藤 整 | | |
| | 伊藤整論Ⅰ | 236 |
| | 伊藤整論Ⅱ | 246 |
| | 「海の見える町」 | 267 |
| 武田 麟太郎 | | |
| | 武田麟太郎と織田作之助 | 274 |
| | 武田麟太郎と島木健作 | 290 |
| 林 芙美子 | | |
| | 林芙美子とその文学 | 302 |
| | 林芙美子とその世界 | 308 |
| | 林芙美子 | 319 |

阿部知二

阿部知二……………322

島木健作

島木健作……………330

人と文学……………332

「獄」と「黎明」……………342

「生活の探求」について……………356

「満洲紀行」……………364

「赤蛙」について……………371

「獄」……………384

「生活の探求」……………388

「煙」……………392

「生活の探求」……………396

石川達三

石川達三論……………400

太宰治

太宰治論……………418

田畑修一郎

田畑修一郎……………434

北条民雄

北条民雄論……………442

人と文学……………454

中山義秀

中山義秀……………464

「露命」……………473

田中英光

田中英光……………480

中島敦

中島敦論……………486

旧知……………498

子供と芸術家と夢……………501

中島敦小伝……………503

新しさと古さ……………506

中島敦小論……………507

中村真一郎

「一九四六・文学的考察」……………514

椎名麟三

| | |
|-------|-----|
| 解題 | 573 |
| 「月の光」 | 567 |
| 「末裔」 | 562 |
| 井上靖論 | 542 |
| 井上靖 | |
| 椎名麟三 | 524 |

作家論
(三)

柳田国男

「新国学談」

いつぞや政治経済の雑誌をやつてゐる人が来て、このごろのやうに世情のうつりかはりの激しいのに雑誌の印刷に手間どるやうな時代には、折角苦勞して集めた記事も、活字になるまへに時勢におかれてしまふのが多くて困ると云つてゐました。新刊紹介の仕事などもやはりそれと同じで、なかなかやりにくくて困ります。

つまり今書いてゐることが雑誌になるには約二ヶ月以上かかるのですが、今の出版事情で二ヶ月もたつて売れ残つてゐる本があつたら、それは余程下らぬ本か、限られた人の興味しか引かぬ本でいづれにせよまづ論評の価値はないと云へませう。

それならばいつそ、「リーダーズ・ダイジェスト」みたいに、これさへ読めば本物は読まなくてもよいといふ紹介の仕方をすればいいのかも知れませんが、これはなかなか難しい技術が要るらしいし、また僕にしても自分で読んで面白かつた本は、あなたにも読んでもらひたいのです。筋書だけ読んで簡単な知識を要領よく得るといふのは、少なくとも文学作品の場合には、あまり意味がないことです。

今月は或る書物についてより、むしろその書物の提出する問題を語るといふ意味で、柳田国男氏の近著「新国学談」や「口承文芸史考」の話をしませう。かういふ本はたぶんこの雑誌がでるところは、もうなくなつてゐるでせうが、しかしそれに含まれてゐる問題は決してなくなる心配はありません。そしてそのころもし柳田氏の別の本がでてゐれば、それはやはり根本においては今僕の云ふのと同じ問題を扱つてゐる筈です。何故なら柳田氏は七十年の間、同じひとつの大きな問題と取組んで来た人であり、僕のやうな素人が氏の著作に興味と尊敬を抱くのも、主としてそのためであるからです。

柳田氏は所謂民俗学者です。その方では大変偉い人なのだそうです。僕はさういふ専門のことはまるで解りません。

しかし氏の書くものは、（少なくとも専門の雑誌などでなく普及し易い形で発表された著作は）単に僕等のやうな素人が読んでも面白いだけでなく、文学や芸術に携る者が必ず読まねばならないとさへ僕には思はれます。

何故なら氏の「学問」は単に古い時代の生活や文化を調べてゐるのではなく、その中心の問題は、現代の日本の生活は如何にあるべきかといふことだからです。

氏の著作を一冊でも読んだ人は誰しも同意すると思ひますが、柳田氏は今日の日本人の生活の問題を最も真剣に考へてゐるひとりです。そして文学とは結局人間の生活についての切実な美しい反省だとすれば、柳田氏ほどの大文学者は今日の日本には他にちよつと類がゐないとも云へませう。人間生活の謎を追求する熱情を氏ほど長い年月にわたつて、生々しく純粹に保つのは、そこらの商売小説家の思ひも及ばぬ境地なので、氏の文体の独特な晦澁もこのやうな氏の精神の孤独な若さから来てゐると僕には思はれます。つまりそれは詩人の書いた散文なのです。

柳田氏は学者としても偉いのかも知れないが、氏の学問の根柢にはそらの詩人以上の詩人が、文学者以上の文学者が今なほ潑刺と生きてゐるのです。

あなたは多分御存じないと思ひますが、柳田氏は昔は本当の詩人でした。日本で最初の真面目な文学近代化の運動であつた「文学界」の運動にも加はり、独歩や花袋などと「抒情詩」といふ詩集もだしてゐます。これが明治三十年のことですからさうぶん古い話です。

そして以後氏はだんだんに文学から遠ざかつて来たわけですが、この日本文学の黎明期の詩人であつた氏の青春はいまでも氏の身裡のどこかに生きてゐる筈です。

それだけでなく、僕には氏が民俗学といふ一見したところ文学とは縁の遠い学問に没頭するやうになつた動機も、氏の詩人たる使命の自覚がそのままに深まつて行つたためではないかと思つてゐます。

言葉をかへて云ふと、明治文学がその若々しい青春時代に持つてゐたさまざまな可能性のひとつが氏にあつては「学問」の形で結実したのではないかと思ふのです。だから氏と文学との表面的な訣別は氏にとつても日本文学にとつてもひとつの隠れた悲劇ではなかつたかと疑はれます。

氏のやうな人を文学の外に追つてしまつたところに、日本の近代文学の或る宿命的な不具が由来するのではないでせうか。明治文学は大正時代の爛熟を迎へるために、そこに含まれてゐたいろいろな可能性を滅して、小さく固まつてしまつたやうなところがあるのでないでせうか。

少なくとも明治の文学精神には氏の「学問」の種子になるやうな思想が立派に含まれて居ました。たとへば氏の友人であつた独歩は次のやうに云ひます。

「多くの歴史は虚栄の歴史なり。バニティの記録なり。人類眞の歴史は山林海浜の小民に問へ。哲学史と文学史と政権史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歴史始めて全からん。」

これは柳田氏が独歩の死後、数十年を経てつくり上げた「学問」の性格を予言した言葉でせう。柳田氏の生涯は氏が独歩とともに「人類眞の歴史」と信じたものを「山林海浜の小民に問ふ」ことに費されたと云へます。

独歩はこの思想をワーズワースなどに刺戟されて得たさうです。しかしかういふ「影響」の問題など実はどうでもよいので、大切なのはかういふ考へが単に独歩だけでなく当時の青年文学者の心底に彼等自身の熱情として生きてゐたといふことです。この点から見ると、柳田氏の民俗学も明治末年の自然主義の作家の方法を（といふより彼等が半無意識に胸裡に燃やしてゐた詩的熱情を）そのまま学問の世界に生かしたものと云へませう。当時の作家がことさらに「凡人」を小説の主人公とし、英雄や偉人までその「凡夫」たる側面から見るのを好んだのと「山林海浜の小民史」に生涯を捧げた柳田氏の熱情との間には或る共通な時代精神が流れてゐます。おそらく氏は花袋や藤村などと世人が思つてゐるよりずっと近い気持の持主なのです。

かういふ風に詩人の直感から新しい学問が生れた例は外国にもあるので、たとへばフランスでも大革命で破壊された中世の教会建築やゴシック美術に対して再び新たな研究の機運を起したのはユウゴオの「ノートルダム・